

男女共同参画の過去・現在・未来 第10回記念シンポジウム報告

男女共同参画推進委員会

節目を迎えたシンポジウム

第90春季年会の3日目(3月28日)、近畿大学本部キャンパスにおいて男女共同参画推進委員会主催シンポジウムが開催された。本シンポジウムは第81春季年会(平成14年3月)において開催された第1回から数えて今回が10回目の節目を迎えた¹⁾。また今回のシンポジウムを企画していた昨年は、男女共同参画社会基本法が制定されてから10周年にあたり、こちらも1つの節目を迎えていた²⁾。そこで今回は我々を取り巻く男女共同参画推進の歩みや、これまでの日本化学会の活動を整理することで、男女共同参画社会の実現に向けて今後何をなすべきか今一度考えようとの意図から、本稿の見出しにあるようなタイトルでのシンポジウムを企画した。

過去と現在~活動の成果

岩澤康裕日本化学会会長が開会の挨拶の中で「ワークライフバランスを考える上で男女共同参画は必然である」とおっしゃられたことに、推進委員一同大いに勇気付けられた。引き続いて本シンポジウムの実行委員長である小職(引地)と佐々木政子男女共同参画推進委員長が趣旨説明を行った後に、日本大学総合科学研究所教授 大坪久子氏より「女性研究者支援、この10年を振り返る~国と私たちの二人三脚をめざして~」と題する基調講演を賜った。日本化学会を含む

男女共同参画学協会連絡会の活動が、国の科学技術政策、特に第3期科学技術基本計画に大きな波及効果を及ぼしてきたことや、女性研究者支援事業が定着しつつある現状とそこから新たに見いだされた問題点について解説された。さらに、日本と欧米諸国における男女共同参画推進事業を比較したとき、課題そのものは似通っているものの、取り組みには大きな差があることが紹介され、長期間にわたる地道な活動の積み重ねの重要性を改めて認識させられた。

続いての依頼講演では、相馬芳枝男女共同参画推進委員会前委員長より日本化学会のこれまでの取り組みについての紹介があった。学協会連絡会における日本化学会の役割、環太平洋国際化学会議 Pacificchem におけるシンポジウムの開催、女子中高生の理系進路選択支援活動といった対外的なものから、日本化学会内部での男女共同参画実現に向けた活動が紹介された。また大阪大学産業科学研究所助教 武井史恵氏からは「女性研究者支援モデル育成事業の実例」という演題で、ご自身の研究活動と育児の両立にまつわる様々なエピソードが紹介された。大学の支援制度によって雇用されたパートタイムの研究支援者(女性)が結果的に常勤の職を得るに至ったという事例は、武井氏ご自身の研究と育児の両立とあわせ、支援制度の成功事例の1つであろう。ただ一方で、支援制度を拡充するためには当事者間でのネットワーク作り



写真 岩澤会長による開会挨拶

の重要性を唱えられていた点も見逃せない。さらに森義仁推進委員から、男女共同参画学協会連絡会が2007年に実施したアンケートについての分析結果の一部が紹介され、日本化学会員のデータと全体のデータでは特に大きな傾向の差異はなく、我々を取り巻く諸問題が社会全般にとっても共通の問題であることが示された。

未来~今後への提言

総合討論では支援制度実施のための組織上の問題などについて活発な意見交換が行われた。最後に小島秀子担当理事より、科学技術発展のための重要戦略の1つとしての男女共同参画社会の実現や、各組織のリーダーをはじめ各個人の意識改革の重要性を訴える提言案が紹介された。特に個人の意識改革という点において、我々教育者の果たす役割は大きいと改めて感じた。

1) 佐々木政子, 化学と工業 2009, 62, 273.

2) 内閣府男女共同参画局ホームページ:
<http://www.gender.go.jp/>

〔シンポジウム実行委員長 引地史郎
(神奈川大学)〕

© 2010 The Chemical Society of Japan